

有名キャラ官能小説CG集第317弾!!

男の性欲は死ぬまで尽きねえ!

HAHACG SYU

ONE PIECE V

Win
95/98/ME

Win
2000

16 MB
Memory

800×600
65536 color

サウンド

キーボード

CG集

成年向























「どうだ、楽しんでるかお前ら？」

「ッ、ドフラミンゴ…」

「！？ くっ」

悪の化身の登場に最初に反応したのはファミリーの者ではなかった。

ビュグッドグッ！ ドクッドクンッ！ ビュルルルッ！！

「ああっ、また…中…」

「へっへへ、たまらねーなあレベッカ。 どーだあ、母親をぶち殺した相手に犯される気分はよー？」

ペニスを引き抜いた途端に、彼女のアソコから精液が溢れ出す。

ゴボッ…フボォッ！！

自然な逆流ではない、あきらかな吐き出し。涙目で睨む彼女は、明確にその男の種を拒絶していた。

「はあ、はあ…はあ、はあ…ううっ、レベッカ…（できれば逃がしてあげたい、けどッ）」

ドフラミンゴの登場までにそれは成功させておかなければならなかった。

名前を変え、長年にわたってこの男のもとにいた彼女だからこそ、その恐ろしさも知っている。

「どーだい、若。若も一つ味見してみねーかあ？」

「ま、待ちなさい！ やるなら私をやりなさい——はあぁっ、ぐっ…これはっ…」

黙れとばかりにヴィオラの全身を糸が縛り付けた。

「おいおい、いくらなんでもそれは酷いってもんだろう、ヴァイオレット。他の男に乗り換えるなんてよ？」

「ピンクの言うとおりの…まったくだ。そんな欲張りな女だったかお前？」

「くううっ…レベッカ…か、には…ぜえ、ぜえ…うぐっ！！」

姪にこの男の魔の手が及ぶなど、姉にあわせる顔がない。

今彼女を守るのは自分だけだと、ヴィオラは気持ちを奮い立たせる。

だが、キリキリと甲高い音を立てながら締まる糸は、彼女の柔肌に食い込んでその身に痛みを与えた。

「うあああああっ、ふぐっ、あくううう！！」

「ヴィオラさんっ！ なんてことをすっ…うっ…？！ んんっ、ぐっ、ふ…っ、んんうううッ？！？」

レベッカの首が絞まり、息苦しさを声を封じるドフラミンゴ。

同時に彼女の前にどかりと腰を落とした。

「クククク、なるほど。リク王の血を引いてるってワケだ、お人よしの血をな」

「はあ、はあ…なにを…、ふあうっ！？ あっ、あっ…んな…はあっ、うう…ッ？？」

乳房の付け根に糸がまわりこんで縛り上げる。それはまだ想定どおりの悪行だ。

しかしレベッカの驚きはそこではない。

糸がマンコの中へと入り込み、膣の奥底で綿密な薄いフィルターを形成したかと思うと、

外に向かって内容物をかきだしはじめたのだ。

「はあっ、はあ…うっ、あっ…いつ、一体…なに、をする…気なの…？」

「フッ、俺の考えをイチイチお前に伝える義務がどこにある？ オンナは黙って大人しくやらせてればいい」

荒々しくもなければ穏やかでもない感情は、レベッカは無論、ファミリーの者にすら彼の真意を読み取らせなかった。

だが、中には動づいた者もいる——

「ま、まさかっ！？ やめなさい！！ やるなら私に…んんうう！！」

「ヴァイオレット、お前には不相応な役目だ、そいつらで我慢するんだな」

そう言いながらドフラミンゴは腰を沈める…レベッカの中へと己を埋めていった。

「んんううう！！！！ だ、大丈夫…ですっ、わ、私なら…いまさら、この…くらいっ」

「違う、レベッカ！ ドフラミンゴはあなたを使ってッ——んんーッ！！」

「おしゃべりは寿命を縮めるぞ？ クククク」

神妙な面持ちは消え去り、いつもの醜悪な笑みが戻る。

そんな自分を犯す憎き男の顔を、レベッカはぐっと睨みつけた。

「ん？ 気丈なつもりか？ まあいいさ、そのうち嫌でも俺の顔を忘れられなくなるだろうからな」

「はあ、（はあはあ…ううっ（お、大きい。けど、このくらいで参っているわけにはいかない、耐えないとっ）」

痛めつけられはしても、命をとろうという様子はない。

ならばこの陵辱の時を耐え抜き、ヴィオラと共に脱出するチャンスを待てばいい。

「（大丈夫、どんなに犯されたって…後で洗えば問題ないんだから）」

だがそんなレベッカの考えをすべて見透かしているかのように、ドフラミンゴは笑みを浮かべながら腰を叩きつける。

糸を便利に用いて一切の抵抗を妨げ、つつがなく犯したいように犯す。

乳はもみ放題だし、足を閉ざさせる事なく、ペニスの抜き挿しも楽々だ。

「はあ、はあ、うんっ、ん！！ うん…いけ、ます…心配いりません、ヴィオラさん…っ、私っ平気ですっ…」

「ち、違うのレベッカ…はあはあ、このままでは…っ、取り返しが…んっ、はあっあ！！」

今度は糸ではなかった。

セニョールピンクのチンポが、ヴィオラの奥深くを絶妙に突きまわし、快感をもってその先を喋らせない。

「ナイスだ。そのままその裏切り者を頼むぞ」

「わかってるぜ若。…別に孕ませてしまっても構わんのだろう？」

「ああ、そのほうが後々安心だ。こいつらにとってもいい感じになるだろうよ、クククク」

ヴィオラは何かいいたそうに必死にもがいている。

だがまだ若すぎるレベッカには彼女が見透かしたドフラミンゴの真意を汲み取る事はできない。

絶望の瞬間が訪れる——

「はあはあ、さあっ、勝手に…いくらでも出せばいい！ そんなことしたって、どうにかなるわけじゃないんだからッ！」

「それは願ってもない事だ、じゃあたっぷり種付けさせてもらおうとしよう」

ビュルルルルッ！！ ドクッドクッ！ ビュドウルッビュグンッ！！！！

「んん！！ …っっ、く…（はあはあ、なんだ、さっきの人と…ぜえぜえ、たいして変わらないじゃない…（はあはあ）」

余裕の笑みすら浮かべられるほど、レベッカは慢心していた。

理由の一つに、射精してスッキリしたであろうはずのドフラミンゴが、どこかムスッとして余裕のない顔をしていたのもあった。

「（お、終わった…なんて事…ああ、お父様、お姉さま…レベッカを守れず、この国を取り戻せなかった事、お許しください…）」

唯一ドフラミンゴが今、何をしているか理解できているヴィオラは悲観にくれた。

糸の能力を駆使し、レベッカの胎内にある卵を縛る。

そして、自らが射精した精子の前にもって行き、絶対成功の受精を行わせる。

その後は、子宮の苗床まで持って行って押し付け、着床させた後、糸を解けば…

「クククク、まずは1つ完成だ。100%だ、逃れる術はない」

「？ 何をいって…んんうっ！？」

「さっき言っていたな？ いくらでも出せばいい、と…お言葉に甘えさせてもらおうとするぞ、ハッハッハ！」

卵巣にまで伸びた糸は、次々と卵子を引っ張り出してくる。

悪魔のような懐妊作業が、幕をあげた…

「——それで、ヴァイオレットのほうは今誰の子供を身ごもってるの？」

「さーねー、ワジもやりまくったしねー、ねー！」

トレーボルはニシシと頬を染めて笑う。

レベッカはドフラミンゴの妻となった。罪深きリク王の孫を、現王が娶り愛する——それは美談となって国民の支持を得る。

8つ子の出産、そして続けざまにレベッカ新王妃の次の懐妊の報が大々的に報じられ、

現王と王妃の愛の深さとして、人々は色めき立つ。

「単純よね、愚民なんて。こんな簡単な話に、誰も疑わないんだからさ」

シュガーは興味なさげにグレーブを頼張った。

多産を強いるのもドフラミンゴの策略だ。

難産必死強え、産後はもちろんのこと出産前にも体力を奪われる。

当然それで逃げることはできないし、憎き相手の子とはいえ、自分の子供を置いてはいけない。

それも多人数になればなるほど必然的に重い足かせとなる。

加えてヴィオラはファミリーの性処理に利用され、二人は離れ離れに扱われている。

それぞれが相手を置いて逃げる事もできまい…束縛不要の巧妙な利用法…

ドレスローザにおいて、ドフラミンゴの支配はさらに強固なものとなっていった。



「おい、そっち持て！ ったく腕が羽ってえのは掴みづれえな」

アナタ達がそれを言う？——モネは彼らに対して、心の中で苦笑する。だが表には出さない…自分も楽しむようにしているとはいえ、早々に飽きてきた。やる気を出されて長引くよりも、とっとと終わらせてしまうほうがいいと思いつけている。

「はあ、はあ…ふう、こんなに中に出して、まだ足りないっていうの？」

少しだるそうな、ゆったりとした口調は、彼らを刺激しないためでもある。

腹の中はもうダボダボで、子宮がその容積をこえて膨らんでしまっている。エッチはキライではないが、気分がもう一つノリきらないこの状況では、これ以上はもう面倒くさくなってきつつあった。

「へ、まだまだ。ガキが入る場所だ、もっと詰め込めるだろう？ 俺らのでボテボテにしてみよ！」

「んっ！ …はあ、ふう…そんなに出来るものなの？ すごいわね」

どこか他人事のように突き放す言い草は、野郎どもに力チンとくるものを覚えさせる。だが、彼らもさるもので、そこで安易に怒りはしない。モネもまた、それがわかっているからこそ、“怒らせない”ために相手を煽ったのだった。

「（まだ、チカラを使うには…もっと萎えさせないと無理ね）」

射精回数はすでに10や20ではきかない。飛び出した自分の下乳越しに己の股間部を見れば、マンコとアナルに突き刺さっている肉棒に衰えは見られない。

「はあ、はあ…ん、んっ…ふうっ、んん…あっあっん。随分と…がんばるけれど、はあはあ…っ」

当然のように乳を揉みしだき、腹を撫で回してチンポの出入りするそのすぐ上でクリトリスを弄ぶ彼ら。気持ちいいし、感じてはいるが…

「私ってば、そんなに魅力的なのかしらね…？」

「お前みてえな変り種でも、女は女だからな。やる穴とデケエ乳がありや、犯して当たり前だろおが」下品な笑い声がそこらかしこで立ち上った。つまりは誰も、一人の女として自分を見ていない男ばかりだという事。

それじゃ飽きもする。想われない、心なきエッチでは、何百回犯されたとて響くものはない。

「そう、ツレないわね。んっ…はあ、あっ！ あふっ…！？ <…食い込んで…っ」

乳房の柔らかい肉に爪が突きたてられた。肉の柔らかさが幸いして、出血には至らないものの胸全体に痛みが走る。

「勘違いしてんじゃあねえぞ？ お前は生きた便器よ、俺たちの下の世話あするのためのなあ？」

「……………」

まともな扱いなど、されようはずもないし、期待もしていない。とはいえ、口に出して言われる事がこれほど胸の奥に響くとは——想像以上の衝撃に、モネの全神経がその働きを一瞬止めてしまった。

「ふんっ！！」

「んっっ、はっあ！ んあっ、ふ…あんっあんっ、あんっ、あっ！」

その一瞬に、偶然にも力の籠ったチンポの突き上げが重なり、彼女の神経という神経を大量の電気が流れる。一気に飛び込んできた信号に頭は混乱し、過剰すぎる快楽反応へと変換された。

「はああっ、あっっ…はあはあ、んんん！！」

「おお、いい具合じゃあねえか？ その感じで締め付けてるオ…デカイ波がイケそうだっ」

膣がチンポを縛る。だが動きを止めるほどではない。直腸がすばんでペニスの動きを阻んだ。しかし尻穴をほじくる動きに変わりはない。

「はあ、はあ、んっんっあ！ はあんっ、あっっ…んんんっ、少し…はっ、はあはあまだ…イケそう…かしら？」

自分自身のカラダに問いかける。快感のみで絶頂に達するには、セックスに慣れさせられすぎたカラダだ。この何十回というやりあいの中でも、本気のイキに達したのはまだ1回もない。

「（せめて、思いっきりイキたいものね。1度くらいは…楽しめそう）」

快楽に身を焦がす、という事を体感しながら、モネはその時への期待を寄せる。ザーメンの目一杯含んだ子宮がグチャグチャと咀嚼し、その形を歪めてチンポを受け入れている。母乳でも噴出しそうなくらいに高鳴る胸、

発達した太ももは内包する筋肉のラインを美しく肌の表に浮かび上がらせ、周囲から膣と直腸へ力を集めてゆく。

「んんっ、はあはあっ、あんっ！ んっ、あっ…も…う、すこ…しっ、ああっ！」

「くおおおっ、いいぞその締めりっ。そのまま、そのままだっ！」

肉棒も大きく太く膨らんで、これまで以上に興奮しているのが伝わってくる。ああ、これならば悪くないかも。そう思わせてくれるエッチが、ここにきてやっとやれる…

「あんっあっ、あんっ、あはっ！ いい…イクッ、イけるっっ、あっあっあ、くる、子宮…にッ…イ…クうっ！！」

ドンッ！！！！

それはシンプルで、かつ非常に美しい衝撃波となって子宮口から胎内に拡がった。白濁に満たされた袋に、新たな射精の圧力が加わり、先発の精子達は子宮の奥へと押されて隙間を作らされる。そして…

ゴゴボッゴゴボググブッ！！！！ ドゴボッ！ ボボッゴバボバボゴゴオッ！！

「……………~~~~~ツ♪ ツ♪ ~~~ツツ♪♪♪」

翼を痙攣させ、足の爪が閉じたり開いたりを繰り返し、太ももの付け根がこれでもかと開いて射精を受け入れる。全身で感じる絶頂——その甘美さに彼女は震え、そして酔いしれる。自分の立場も忘れてまどろみ、至福の時に心身をゆだねるのだった。

「クスクスス…もう、萎えちゃったのかしら…残念ね」

ときどき良い波がくるようになったせいで、つい何百回と回数を重ねていた。しかしペニスが萎えきった理由は半分が打ち止め、もう半分は…凍えさせられた事によるものだった。

「なかなか悪くなかったわ。またしましょう？ 生きていたら、ね」

バギン！ ガララッガチャッガチャン…

拘束の鎖が砕けて落ち、彼女ブルルと身をふるわせる。濡れた獣が水分を飛ばすように羽をばたつかせ、大きく伸びをした。

「もうここに用はないから…さようなら」

一言残して、翼を大きくはためかせ、そのカラダは浮かび上がる。はるか空へと遠ざかる彼女の姿を、雪と氷にまみれた男達の白目だけが見送っていた。



海賊——それは危険と隣り合わせの職業。
命のやり取り、裏切り、争いは日常茶飯事の危険な世界だ。

「くっ、まさかこんなところで捕まるだなんて！」

「少し甘く見てしまったようね、かなりできるみたいコイツら」
名をあげた海賊とて、敗者となる可能性はそこらに転がっている。
そして無名でも強者は存在し、慢心は一瞬にして失墜の原因となった。

「あーもう、他の連中は一体なにやってんのよッ?！」

「落ち着いてナミ。少なくとも殺されはしないわ」
賞金首は手に負えなければ首を取り、討ち取った証拠として懸賞金と引き換える。

だが、殺すよりも身柄を拘束したほうが何かと便利に使えるのだ。
特に一味全員を捕えていないのであれば、人質としてもその命に価値がある。

「ふふん、こんな三下連中に私たちが殺す度胸なんて」

「んっ…! そう、ね…でも、別の度胸は…んっあ、ある…みたいよ」
急に妙な声をだしはじめたロビンの方を振り返る。
ナミは軽く顔をしかめた——粗野な男達が彼女の尻を撫で回している…陵辱の時。

「…厄介ねそれは。きゃっ!? ちょっと、気安く触らないでよッ」

急に腰のくびれをなでられて、彼女は思わず声をあげた。
偶然にも、腰まわりの中でも特に感じやすい性感帯のあたりに触れられ、ナミは心音を跳ね上げる。

「まいったわね。はあ…はあ、これは、骨が折れそうなどころの騒ぎではなくなるかもしれないわ」
周囲を確認しおえたロビンは、深くため息を吐く。
野郎ならともかく、女の海賊ならばただ縛って転がしておく手はない。
誰かがおっぱじめれば、必然と全員が群がりはじめる。
大型の船ならばその頭数は100は余裕で越える事だろう。

「…っ。前言撤回する? これじゃ“いき”殺されちゃいそうだわ…あははは」

海賊の一味になった時から、こういう事態になる事も覚悟の上だ。
犯される事に2人ともいまさら怖れる事もない。
だが、仮にも筋骨隆々とした海の荒くれ達を相手に、やりきれる自信までは持ちえていない。

「んん! はあ、はあ…普段から、しておけばよかったかしらね、…んっ」

一味にも男達はいる、むしろあまっているくらいだ。
その気になればやりたい放題、くっは投げ捨てるであろう男女比なのは間違いない。
冗談っぽく口にしたロビンだったが、その額には冷や汗が流れていた。

「あぐっ! 痛っ、痛たたたッ! 胸のほみ方も知らないの!？」

ナミの罵声にも男達は怯まない。
彼らにとってもとよりやれればいいのであって、相手の事など関係ないのだから何を喚き散らそうとも無意味だ。

「くっ…はあはあ…、ううッ!? そんな、いきなり挿入してくるだなんて…はあぐっ!!」

愛撫もほどほどにチンポが股間に突き刺さる。
ロビンは呻き、舌虫を噛み潰したような表情を浮かべ、詰まった息を大きく吐いた。

「ロビンッ。あ、あんた達ねー、女の子は優しく扱いなさいよッ…う…。…なによ、挿入れたきゃ挿入れなさいよッ!？」

だがナミは生唾を飲み込む。
アソコに押し当てられたモノは、見なくても巨根である事がわかったからだ。
強い緊張感と不安——本当に入るのか、どれほどの苦痛が待ち受けているのか?

「う…あっ! …はあふう、はあ…んんんっ、う…な、なによ、やるのが怖いとか言うんじゃないでしょうね?」

入りかけた、今押し広げられた!
想像以上に大きく広く、マンコの入り口が開いた感覚に、ナミは内心おののく。

なぜか男はそのまま突き入れることなくペニスを退いた。

「はあっ、くっ!! あんっあっ、うあっ…はあっ! こんなに、もっ、奥にまで届くものなの…んうっ!」

目の前ではロビンが盛大に犯されている。
まだ1本目だというのに、明らかにその喘ぎっぷりは行き過ぎていた。
それともそうになってしまうほど、すごいのかと考えかけてナミはそれを捨てる。後ろ向きな考えはやめておこうと。

「はあ、はあ、はあ、はあ…ヤ、やる気なら、とっととすればいいじゃない!? 時間切れで後悔する事に——ツぐう!」

いつやられるかの緊張に耐えられなくなり、吠える彼女に肉棒が埋まってゆく。
多くの者は勘違いしがちだが、女の穴の中は感じる部分が限られている。
本気で感じさせるには、物理的な穴と棒だけでは相当な労とやり続ける時間が必要だ。

「はあああ!!? な、何…この感じっ、さっきとは…違っ…うう!？」

この男は他の仲間たちとは違い、それを知っていた。
焦らず、想像させる、耐えられなくする——精神に働きかけ、感情が伴うことで、性感帯は鋭敏に肉棒の存在を感じ取る!

「んふう!!? はあ、はあっ、あっ、ひはああっ!? 嘘っ、なんで…こんっ、なにつ!??」

最初に入り口をこじあけて退いたのは、自分のペニスを想像させる材料を与えるため。
さらに目の前で仲間がやられてる姿を見させて、自分もこれからああなるというイメージを膨らませる。
狡猾に、そして大人なやり方…女を喰い慣れているやり口は、キャンキャンと強がる女には効果てき面だった。

「はあはあっ、あぐうっ、な…ナミっ…大丈夫…。うっ、く…んん!!」

「ロビンこそっ、はあはあ、うう…あうっ、はあはあ、余裕なくなってるじゃないっ」

反面、ロビンのように思慮深く冷静な女は、力で貪る。
苦痛だろうと快感だろうと構わない。圧倒的な“量”で彼女のオンナの神経に働きかけ続けるのがよく効く。

「うあっ、はあはあっ、だいぶ…甘かったみたいっ、ねっ。わたしたち…はあっあっ、あつうううんっ! ふうっ、ああっ!!」

あのロビンがここまで乱れる姿など、それなりに長い時間を共にしてきてはじめて見る。
それだけ自分達が敵を甘く見すぎていたという事を、ナミは自分を突きあげる巨根によって身に染みさせられる思いがした。

「はああっ、あ! ごめんなさい、ナミっ…私、もちそうにっ…な…い、かもおおっ!!!」

ドブッ! ブシッ!!! ビュシュウウ!! ブブッ、ドビュグッ!

励まそうとした瞬間、急にロビンと男が制止して1秒。
股間部がまるで爆発でもしたかのように四方八方に噴出す中出しされたザーメン。
男の精液の射精量は、知識上ではほんの数cc程度だと記憶していた二人にとって、その量は衝撃的だった。
——こんなのを後100人以上?
女の身で海賊としてある事の覚悟がまるで足りていなかった事を、この後、二人はその身に長い時間をかけて叩き込まれる…



「はあ、はあ、はあ、はあっ…あっ——うっ」

足がもつれて、アインは派手に転げる。慣れない場では割とよくある事だが、追われているとなれば話は別だ。

「痛う…ハッ!? くっ、そう簡単にはッ」

たった一度、時間にして2、3秒その場に止まるという事がどれだけ致命的か、彼女は思い知る事になる。

「悪いけど、おとなしくしてらんねえっていうなら、しょうがねえしなー」

緊張感のない態度の一味の長は、鼻をほじって頭の帽子を抑え付ける。直後、飛びあがって両腕を伸ばし、アインの肩を掴んで彼我の距離を一気に詰めた。

「ッ!! まさか、そんな風に…くっ!!」

ピタンッ

もんどり打って、背中や硬い床板を味わわされた。相手の体格はそれほどではない。だが跳ね除けようとしても見た目にそぐわぬ力で彼女は押さえつけられた。

「ふいー、やれやれ。おーい捕まえたぞー」

「はなっ、してっ! はあはあ、私は…先生の下に帰っ——んぶっ?!?」

シタバタするアインの唇に、唇が重なる。しかもそれはただの口付けではない。キスというよりも口を食べられているかのような感覚だった。

「んんー、んっ、んんんっ、ん——ぶっ——うっ!!!」

「あー!! てめえルフィ! なに抜け駆けしてやがる!? ナミさんばかりじゃなくこんな可愛い娘ちゃんまでッ」

声のする方に瞳だけ向けると、黒い足が見て取れた。しかし一瞬にしてすね毛のある肌色に早がわりして、彼女のすぐ側に着地する足音がこだました。

「どけこの野郎!! 船長だからって女独り占めはゆるさねえぞコラあっ!!」

「んんッ!? んー、ん——!!!」

黒足は口を塞いでいる男の頭を押しつけようと必死になっている…それ自体はありがたい事だ。が、どさくさに紛れてちゃっかり胸を鷲づかみにして握り揉んできていた。

「んむっ、むむっうっ!! んっ、んっ、ふぐむ——うっ!!!」

そのうえ色恋沙汰にもっとも縁遠そうな顔をしているこのゴム男が、おそろしくテクニカルな舌使いで責めて来る。舌までゴムなのかと思えるほど長く、伸縮し、自在にうねって彼女の口内や舌をねぶり尽くしてくるのだ。

「おいおい、手荒な真似してんなよ。みっともねーぞお前ら」

ガチャリと複数の刀を立てかける音がある。続々と集まってくる男達の存在に、アインは焦りを覚えた。ただでさえ相手のホームで、圧倒的不利な場だ。数の上でもこうも纏わりつかれては脱出もままならない。

「ぶっはー! しゃーねーなー。じゃ、コッチはゆずってやるよ」

「よっしゃー! 可愛い娘ちゃんの唇は俺のモン——」

「ニシシ、かわりに俺はこっち貰うからよ♪」

「はあはあ、うっ!? そ、それは…ああッ!!! そ、そんなあっさりと、んんんんッ」

当然ギャーギャーと黒足は文句を言う。だがアソコを男根に貫かれ、周囲の声はすべて雑音と化して耳に入ってこない。

「ありゃ? もう本番までいってんのか? ペース早すぎだろお前ら…」

「どこぞのバカ足がうるさくてな…ったく、もっと落ち着いてだな…」

「とかいいながらお前もちゃっかり何ヶツに挿入れようとしてやがんだッ!!!」

黒足の言葉にアインはぎょっとした。いつの間に背にもぐりこんだのか? アナルに自分の一振りを埋めだし、尻穴に違和感を感じるまでまるで気づかなかったのだ。

「い、いつの間に!? ちょっとまってそこにそんなモノを…ふぐっ、あっあっ、き、つい…ッ!!」

直腸がカーッと熱くなり、そこから全身に熱がひろがってゆく。全身の筋肉がふるえだすのは、奥の筋肉が緊張して硬くなり、柔軟性を失うからだ。皮下脂肪の揺らめきを、うまく制御できなくなったカラダは、乳房からふくらはぎまで、プルプルとイヤらしい揺れ方をする事を許してしまう。

「んあっ、はあっ、うっうっ! んぐっ、ふぐっ…んんうっ!! はあっはあっ、先生っ…私、失って…っ」

「へー、ナミやロピンとはまた違うんだなー、マンコ。ハンコックのヤツは蛇みてーにうねってたっけか」

「ルフィお前…どんだけ手エ出してんだよ? 俺なんかまだナミの気まぐれの1回だけだぞ」

長鼻が羨みよりも呆れ半分で問かけると、アインを犯しながらも彼は片手で数を数え出した。

「ん…修行の合間にハンコックとこのヤツとやりまくったしなー。あ、人魚のデカ姫ともやったなー」

数え切れねえ、と笑顔で指折りしていた拳を開く。しかしその間も隙がない。腰のつきこみも深いところで抜けないようしっかりとハメこんだまま継続している。

「(こんな隙がないだなんて…これが…これが、麦わらの一味?)」

子宮でたしかに感じるその実力と男としての存在感。ペニスまで伸縮自在なのか、まるで自分のマンコの中の深さや形状にあわせているかのような大きさ…仲間内で言い争いながらも緩まない犯し込みのこの動きと、アインはもはや諦めかけていた。

「…。テメエに自信がないか? なら自信をつけさせてやるよ」

「え? あっ、あっ、んうんっ!?! な、なにをっ、はあっ、あっ、うううっ、ふああう、ああっ!?!」

急に尻穴のペニスの動きが強まる。四肢から抜け落ちつつあった筋肉の緊張が、ふたたび張りを取り戻し、力がこもる。

「じ、自信って…あっあんっ、な、なにをっ。はあっ、あああん!! あんっ、あんっ…~~~ツツん!!!」

グチュルロツ! チュルルウルルッ!!! グチュッブチュウウウッ!!!

「うおっ!? お、おいおい、急に締め…どわっ」

ビュゴッ! ビュグルルルルルッ!!! ビュブッビュククンッ!!!

黒足と言い合っていた彼は、急なマンコの締めつけに翻弄されて射精する。一矢報いた? ——。陵辱されているというのに不思議な感覚がアインを包み込む。そんな彼女の後ろで、彼はやればできるじゃねえかとほくそ笑んでいた。

「あの女はどうした?」

「ヨホホー、フランキーさんが新作のチンポを試したいとかでお部屋に連れて行きましたよ〜♪」

彼女の下着らしきものを頭にかぶり、上機嫌のガイコツ。特になにがしかの感情を持つこともなく、彼は刀の鞘のズレをなおしながら、そうかと一言だけ返した。

「ルフィさんは今日はロピンさんと寝てます。ナミさんは欲求不満らしくてウソップさん達をお風呂に引っ張って——」

「で、アイツは仲間ハズレで泣いてるってわけか」

船の縁に黒い影が夕バコをふかしながらえぐえぐと女々しい声をあげている。仲間はずれにされた理由は簡単だ、なにせ裸を見ただけで血を吹く男なんぞ、女たちからすれば迷惑だしやる気を削がれる。風呂場のほうからかすかにウソップとチョッパーを交えたナミの喘ぎ声が聞こえだすと、男の慟哭はいっそう悲しみを深めていく。

「…お前はいいのか?」

「私にはチンポがありませんから、ヨホホホー」

そういうゾロさんは? ——その問いに彼はただ一言、そんな気分じゃねえんだと短く返す。それ以上の会話は不要とばかりに、夜の静かな風が甲板へと吹き込み、男達を優しく撫でた。



「うおおおお、たしぎちゃん!!」

「キャ——ッ、や、やめてください!!」

元に戻ったのは良かったものの、彼女のあらゆる服装は海兵達を暴走させてしまっていた。

「(ふ、服を…せめてもっと普通のっ)」

中身が上司のスモーカーであれば彼らも手を出さないだろう。

しかし中身に戻ったとなれば話は別。

普段真面目で露出の少ない彼女だ、彼らはここぞとばかりにその劣情をぶつけてくる。

ふにゅんっ

「やんっ!? ヘンなところ触らないでくださいッ。こ、こんな事してる場合じゃッ」

島からの脱出はもちろんの事、島での事を報告し、しかるべき陣容を整えて再度事に当たらなければならない。

それは下っ端の彼らにもわかっている事だが、普段は手の届かない上司の彼女を得る貴重な好機だ。

エロスが男達をかきたてる。

「ああ、たしぎちゃん! 想像じゃないマジもんのたしぎちゃんのオッパイ!!」

「くそっ、てめー俺のたしぎちゃんにさわってんじゃねー!」

「誰がテメーのだ! んなわけねーだろがッ」

ケンカしつつも、それぞれに彼女のカラダの各部を触って放さない。

たとえ胸や股間でなくてもいい、彼女の肌のいづこかに触れてさえいればチャンスがあるとばかりに

伸ばした手を意地でも引っ込めない男ばかり。

「うううっ、こんなことをすると中将にっ、ああっ、はぁはぁお、怒られますよっ!?!」

だが誰も聞く耳をもたない。アイドル的存在の前には身分の上下など関係ないのだ。

彼らの頭の中には、彼女を自分だけのものにするという事しかない。

「ひっ!? キャーッキャーッ、やめてっ、広げないでくださいッ、いや——っ!!!」

両足をみっともなくおっぴろげられ、恥ずかしい部分をご開帳する格好を取らされて、彼女はわめき散らす。

男くさい海軍にあって、女らしいその反応だけでも、彼らに強い性的興奮をもたらしてくれた。

「うおおお、ぜってーたしぎちゃんは俺のものにするっ!」

「ばかやろー、他人の嫁になんか行ってやる!」

「いつおめーの嫁になった!? 彼女は俺の妻だっ」「おまえこそ何行ってやるこのクソがっ!!!」

妄想が先行して暴走にかわり、それが海兵たち全員で生じているのだからもはや収集もつかない。

殺気立ちすらしている彼らを、下手に刺激したなら一体どうなるか。

「いやぁっ、助けてください、誰かっ…中将っお!!」

そんな男達にとって、相手の女が自分以外の男を意識するなど許せないものだ。

たしぎの一言は、そんな男達の感情など露知らず放たれたもの…それゆえに悪意も冗談もない言葉は“より効く”

「…スモさんは関係ねーだろーがよお、今は俺の嫁だろーがあ!!!」

「スモさんにゃ悪いが、たしぎちゃんは俺の妻決定なんで!」

まとまりのなかった男達は、変わらず口々に好き勝手ほざいている。

だがさきほどとはうってかわって、あきらかに全員が一致団結してしまった。

「ひいっ!? な、なに…この感じ? あっ、嘘でしょう!? ちょっと、そんな当たり前に…あああっ!!」

一人がペニスをぶち込んできて、そのまま下腹部を圧して押し上げる。

子宮がひしゃげる程度では済まない。内臓まで上へとスラッ衝撃が、操を奪われた現実をより濃く彼女に感じさせた。

「うおー! たしぎちゃんうお——!!!」

「だ、だだ大丈夫…たしぎちゃんは俺の嫁、最後は俺の子供を産むんだ、だから大丈夫…ぶつぶつぶつ」

「あう、あうっ、そんな…こんな事って…、私…私…」

目を見開いたまま、まばたき一つする事なく、声なき慟哭をノドの置くから漏らしている。

ショックから立ち直れない間にも、彼女を侵略した男のペニスは、さらなるものを目指して既に前後していた。

「うおらあああ、たしぎちゃんを孕ませたヤローがっ、たしぎちゃんを独占できるっ、うおおお!!!!」

自分の種で、いや俺の種で、彼女を孕ませる! ——異様な雰囲気立ち込めるその中心に彼女はいる。

揺れる胸を原型をとどめないまでに揉まれているのも、セックスに至っている股間の状況も、

すべては夢か幻、あるいは他人事のような気持ち…否、そうであってほしいという願望がたしぎの中で渦巻いている。

「あああ、あっ、うっ、あっあああ、嘘…これは、嘘っ、はぁはぁ、違う、きっと…ありえない、私は…っ」

膣がうねる、子宮が龟头をいやがってその口を滑らせる、クリトリスが膨らんでそれを指で弾かれる。

乳首が伸び上がり、我先にと口をつける男達の醜悪な顔。

——すべてが現実だとわかっていても、わかりたくない。

「うううっ、いや、いやよっ、こんな…ぐっっ、あああ、あっ! 私は、真面目に…がんばって…っ」

男たちにうずもれていく。現実ではなくそのココロが…

内からほじくられる閉ざされていた穴は、男根を知って柔らかくなってゆく。

肉欲に負ける。このままでは——墮ちる。

「はぁはぁ、はぁはぁ、いや、いやいやぁ! どうして私がっ、そんな絶対に嫌…あああ、ふあああっつ!!!」

ビュル! ブグッポゴブグブッ!!! グシュルルルッブシッ!!

そっぽを向いた子宮口に阻まれて、中に入れなかったザーメンが膣内で暴れまわり、

やがて泡だって結合部の隙間から吹き出す。

犯された現実が、目にみえる形で示されたとき、たしぎの心は深く落ちていった…

ビュクビュグビュブッ! ビュグッビュグンツ…

「はぁはぁ、ぜえぜえた、“大將”…っ、もう…出ま、せ……」

腰を上げ、引き抜いたペニスは途端にヘタリこんだ。

粘っこい白い糸がマンコと尿道をつなげて伸び、やがて切れると男は白目を剥いてベッドから転げ落ち、動かなくなった。

「次、早く来てください」

艶やかな肌を汗が滑り落ち、暗い室内に浮かび上がる色はどこまでも欲情をそそる。

控えている新人海兵たちを掴み、ベッドへと仰向けに叩きつけてはその上にサッと乗るという一連の流れ。

鮮やかで流麗なその動きに目を奪われている間にも、すでに事ははじまっている。

「うあああ、た、たしぎ“大將”おおっ、はぁはぁ、うっ!!!」

彼女の下に配属された新人の通例儀式。

女を経験したことのある者もない者も、これでたしぎに絶対の忠誠と敬愛を誓う。

「いいですか、皆さん。あなた達は私と契りをかわしました。その意味…おわかりですね?」

男の上で腰を振りながら、しかし一切の乱れなく淡々と語る彼女。

乳首が上を向くたびに白いものが噴出す。10何人目かの子供を産んだばかりだ。

「——では、これからしっかりと励むように。以上です」

だが、たしぎの話を最後まで聞ける者はいない。終わるころには全員が意識を失っているからだ。

彼女は一つため息をつく、乱暴に上着だけを羽織り、ひよっこ海兵達の転がる部屋を後にするのだった。



「ううっ、やっぱり“二人”でどうこうするのは無謀だったわね…」
ナミは腹をくった様子で、苦笑いを浮かべる。
全身に力が入らない…
そればかりか自分から股を開いて、トレーボルの気色の悪いドロドロなカラダにマンコをまさぐらせている。
「はあ、はあ…おかしいわね…私達…“二人”で何をしようと…んっ、う…くっ」
怪訝そうに小首をひねるロピンだが、深く考える余裕はない。
根元からガッチリと掴まれた両乳房を、これでもかと振り乱されて苦悶を浮かべる。

「フッフッフ、いくら賞金首の女海賊とはいえ…俺のファミリーに“たった二人”で挑むなど、何が狙いだ？」
ドフラミンゴの言うとおりだ。一体何ができるというのか…
修行で力をつけたとはいえ、人数的にも海賊経験でも、戦力も権力も何も有利なものはない。
ロピンもナミも、こんな無謀な真似をする性格でないのは互いにわかっている——当人すら不可思議で困惑していた。

「はあ、はあ…さあ…わけわかんないわ…。どうしてこんな事、私たちだって…んうっ、んっあ！」
「何か…あう、忘れてるような…？ そんな事ないわよね…どういうことかしらホント…」
煮え切らない回答に、一瞬キレかけるドフラミンゴだったが、シュガーが視界に入った。
彼女がニヤニヤしている様子から、彼はピンとくる。
「それが“主犯格”は既にお前の能力で…クククク、そりゃあ忘れてはいるはずだ。こいつらは残りカスってわけだ」
「？ 何ワケわかんないこと…んっ、はあはあ、女だからって舐めないでッ、そうやってせいぜい勝ち誇って…あぐっ!？」
ナミの首がぎゅっと締まる。見えないほど細い糸が、一瞬呼吸を阻害し、彼女の威勢を削いだ。
「フッ、活きだけはいい。“どこの誰の金魚のフン”だったかはこの際どうでもいいが、何かと利用できそうだ、クック」
そう言うと彼は、糸ではなく手で直接ナミの乳房を握り締めた。
ただし愛撫でも沸いた劣情にまかせた行為でもない、それは明確に立場をわからせるための肉体への恐喝行為だ。
「んあああああああっ!! ぐうっ、う…う～～——はっあっ! はあはあ…無駄よっ、何をしたらって私たちは…ぜえぜえ…」
「勘違いするな、端から屈服させようなんざ思ってもいないさ。そんな面倒なことをする必要すらない」
ドフラミンゴは、ぼいっと投げ捨てるかのようにナミの胸から手をはなす。
するとトレーボルのドロドロのカラダが投げ捨てられたその身を受け止め、すぐさま纏わりついていった。

「んねー、んねーこの女、俺がくってもいいかあ、べっへっへえ〜」
「ッ…気色悪いっ、んんっ、離れなさいよっ!」
だがナミのパンチがトレーボルのいくら叩いても、ヌメヌメのグチョグチョに拳が沈むだけで、なんら攻撃効果はない。
そうこうしているうちに、再び大事な穴にドロドロがなだれこんできた。
「好きにするがいいさ。どのみちコイツらの末路は決まっている」
「んべっへへー! よがだなぁオイ、俺がたっぷり可愛がってやるーラッ」
するとマンコに流れ込んできたモノが、流体からみるみる固体へと変わっていく。
それはトレーボルの男性器だった。

「!?! 突然中が…あふっ、い、一杯にっ…!?! んうっ、うっ、くふあっ!」
「ねーねー、どんな気持ち? んねー、俺様のカラダで腹ん中いっぱいってどんな気持ち?」
膣には固体化したペニスが詰まっている。インサートの衝撃も痛みもなく、いきなり押し広げられた。
だがそれだけにとどまらない。
先端部は流体のまま胎内に侵入し、子宮いっぱいまでトレーボル自身のドロドロのカラダで埋め尽くされていた。

「そうね…はあはあ、最悪の気分だわ、んっ、うっ…苦痛がない分、余計にムカツクッ」
「げべっへえ、そういうなし。あっちみだいに苦しむよりマシだろお〜?」
言われてふと見ると…
「ふぐうう!! っ、うっ、はあっ、…あぐっ、はあはあっ! あっ、あっ、んんんんっ」
叫び散らすロピン。
彼女の女の園は赤の混じった液体を吐き出し、抜き挿しするペニスによってかきだされているようにも見える。
苦悶に歪んだ表情から、その苦痛がいかほどのものかは外野にも計り知れた。

「うっ、ロピン…。はあ、はあ…んぐっふ!? あっ、んっ、だ、だからっっ」
「んねー、んねー、だからねー? 俺ほど女に優しい男はいないよー、げへっげへっ♪」
ナミの膣内をうごく肉棒は、まるで流れるようにぜん動している。
膣の形状に都度適合させてくるトレーボルのペニスは、どれほど動いたところで苦痛は微塵もない。
強いていえば、膣や子宮を圧迫する感覚くらいなものだった。

「はあはあ、こんな気持ち悪いヤツにっ…んっ、ああうっっ、はあはあっ」
「べっへっへえ、お前ん中あつたけえ〜。んねー、腹ん中、もっと入ってもいい? ねー、んねー?」
「ふ、ふざけないでっ、いいわけないでしょ! あふっ…んっ、んんんんんんん!!」
ためさんとばかりに子宮内のトレーボルの容積がどんどん増えてゆく。
子袋はその本来の大きさをこえて内から膨らまされていくが、限界なのかソフトボールより一回り大きい程度で止まった。
「しょうがねえ〜、かわりに俺のガキを住まわせるか、べっへっへっ♪」

「ううう…屈辱っ、しんでも孕まないっ…こんな、こんなきもちわるいのでっ!!」
ドブ! ヌプヌルヌグググッ! グヌグヌンッヌボボボボッ!!!

射精まで気持ちの悪いドロドロ感に満ちたトレーボルの種付け。
勢いよく膣内を焼くのではなく、大容量でゆっくりと粘質たっぷりに押し寄せてく覆い尽くす感じがまたいやらしい。
「べっふう〜…気に入ったあ、お前ぜったい俺のガキ産ませるからなあ♪」
まるで乳を吸う子供のように、ヌメヌメとしたものがオッパイを吸い上げる。
無論、まだ出る事はない…だが、このままでは本当にそうなりかねない。
しかしナミには歯噛みしてトレーボルの尻みつけるくらいしかできなかった。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ…あんっ、あんっ、はあああ!」
「クククク、随分と従順になったもんだ。そんなに気持ちいいか? ニコ・ロピンよ」
年単位の月日が流れた頃、彼女はドフラミンゴの従僕と化していた。
激しい陵辱、苛烈な娼婦生活を経て、徹底的にエロく“壊された”ロピンは、もはや大人の玩具と変わらぬ存在だった。
「トレーボル、“お前の”女はどうしてる?」
「げべっへっ、3人目ひりだして、4人目植え付け確認できたから、また産むまで稼がせてるんねー」
ナミはトレーボルの子を孕まされて、妊娠中は高級娼婦として稼がされる日々を送っている。
元々が上玉なだけに、母乳を撒き散らしながら喘ぐ様に、高額を出してでも抱きたいという男達の好評をえて闇の世界で人気を博していた。
「フッフッフ、コイツらなんていう一味だったかは忘れたが、せいぜい役に立ってもらおう…死ぬまでな」
ドフラミンゴの高笑いの中、ロピンはもはや意に介さずその上で腰を振るうだけ。
自らを忘れ、快楽に溺れ、何もかも捨てて壊れていく…
仲間の存在すらも忘れて、ただ無心に快楽を貪るばかりのオンナに成り下がってしまっていた。



「シシシ、すんげえやらけえなあ♪」

「んっ、だ、ダメだって…そんなところ、んあぁっ！」

マキノはすっかり翻弄されて、いいように弄ばれていた。相手が相手だけに、強く対処するにも限界がある。だがこのままだとエスカレートする一方であることは目に見えていて、彼女は困りきっていた。

「おいルフィ、あんまり揺らすなって…たく、オッパイばっかとか子供だなあ」

「んだとお？ 俺はもう子供じゃないやいっ！」

エースとのやり取りだけを見れば、微笑ましいことこの上ない。

しかし、彼女のカラダはその無邪気な手や口に貪られている。

「んっ、あ！ つ、強くは…っんんっ！ 痛っ…」

「ほら、二人ともケンカすんなって。痛がってるだろー？」

サボが寝ても、二人が一度はじめたケンカをやめる事がないのはわかっている。マキノも、そしてサボ自身もそれは理解していたが、とがめる事でやり過ぎないプレーキにはなる。

「と、とにかく二人とも離れて…んはうっ！？ ちょ、ちょっとエース?!」

「へへ、お前はいつまでもオッパイちゅーちゅーしてればいい。おれは一步先におとななやり方でやるぜ！」

ケツ穴に指をつっこみ、グリグリとネジまわすエースにマキノはますます困惑する。さすがにそこを責められるなど経験がない…どう耐えるべきか？ 対処すべきか？ まるでわからなかった。

「なんだとお！？ おっぱいのどこが悪いんだっ、こんな柔らかくて気持ちいいんだぞ！」

負けん気で言い返ししながら、ルフィは自分の言葉を証明するかのように改めてマキノの乳房に吸い付く。片房に上半身全体で抱きつき、肉でもかぶりつくように乳頭をくわえて引っ張った。

「あぁっ、だ、ダメよルフィッ！！ そんな…んんっ、の、伸びちゃうからっ！」

「ンギイイイツ、エースにやぜったい、まけねええっ…！！」

自分の頭よりもデカイ乳肉の塊、それもわずかな力でぽよんぽよんと柔らかく変形するシロモノだ。ルフィの琴線に触れないはずがない。しかもそれが二つもあるとなれば、夢中にならざるを得まい——だがそんな彼を、エースは鼻で笑うのだ。

「いいかルフィ？ おとなはな、オッパイに夢中になったりしねえ、マンコの——」

「マンコの穴なら、おれもしてるぞ！ ちんこズボズボすんだろ？」

「あ、あなた達いい加減に…はぁっ、はぁっ、んっふぁっ！」

マキノの声などまるで聞こえてないかのように二人は“おとなぶり”を競いあう。

エースは彼女の尻穴から引っっこ抜いたばかりの指をチツチツと横に振った。

「そんならい当たり前だっつーの。おとなはなあ…さらにその先！ ケツ穴にちんこズボズボすんだよっ！」

「な、なんだってえええええええ！！！！？」

「ちょ、ちょっとエース！？ そんな事どこで覚えて…や、やめなさいソレはっ！」

声にこれまでにない必死さが宿るも、マキノの制止をいまさら聞くようなエースではない。自分のチンポを構えると、全力で突き挿す！

「んひいいいい！！！？ あっあっ、…はぁ…あっ、う…や、…だ、だめ…だって…はぁはぁ、いってるのにっ」

「へへ、どうだいルフィ？ これがおとなのやり方ってもんだぜ」

「ちぐしよおおお！！ おれだって、負けるもんかっ！！」

そう言うと、ルフィは床に背中をこすりつけながら、腰を彼女の股間にあわせんとうごめく。

「はぁはぁ、はぁはぁ、だ、だめよルフィまでっ。いまそっちにも挿入れられちゃったら…んんうう！！」

負けたくない必死の形相で腰を叩き込んできたルフィ。

前と後ろの穴の中で、二人のチンポが肉壁を隔てて競う。

「そんないままでのやり方じゃ、いつまでたってもおれには勝てないぜルフィ？」

「うるせええ！ おれはまけないっ、うおおおおおおおっ」

乳を掴んで力任せに腰を振るい、マキノを犯すルフィ。その様子を見下ろしながら、エースは彼女の上ののっかる形で尻穴を犯す。悪ガキのお茶目な悪戯も度を越しすぎている状況だが、挟まれたマキノはどうする事もできなかった。

「あんっあっ、はぁうっ、んっ、あんっ！ はぁはぁ、だめえっ、こんなのだ、めえっ！！」

「ぜえぜえ、はぁはぁ、おれの、おれのほうがっ。勝つんだ、今日こそっ」

「まだまだ負けねえよ、おまえにや。どうした、もう息きれてるぞ？」

マキノそっちのけで争う二人。傍観してたサボは、自分のチンポを彼女の前に差し出しているだけで、争いには参加しない。

「（慌てちゃだめだかな、こういうのはさ。へへへ）」

「はぁはぁ、ううんっ、あうっ！ あんっ、ああっ。ぜえぜえ、二人とも、んんうっ、そろそろ、本当に…っ」

だいたい二人が長続きしないのはこれまでからもわかっている。

マキノも二人に責められて、1回戦でフラフラになるのもお決まりのパターンだ。

サボは必勝を確信していた。二人がダウンし、獲物が弱ってからがつつりと責めればいい。

「あぁっ、あん！ っ、いやっ、もう…いい加減にしなさいっ、あぁあっ、はぁはぁ、んんうううう！！！！」

ビュルロツ！ ビュグッビュグン！！

ドクドクッ！ ドクドクドク…ドクンッ！！

「ぜえぜえ、は—は—…ち、ちくしょう、またまけちまったっ」

何を基準に勝ち負けが決するのか不明だが、少なくとも二人の間では明確にそれを理解している。エースは勝ち誇り、ルフィは悔しさに顔をしかめ、それを隠すかのようにまたオッパイに吸い付く。中に射精する事も当たり前で、ヤンチャ盛りも悪い意味で極まっている。

マキノはもうクタクタで、それ以上二人を怒る気力もなくなっていた。

——それがいつものパターン。

しかしサボが狙うのは、その後だ。

着替えに別室に行く事もいまままでと同じで、今回はそれについていき、そして悠々と襲う。

「あんっあっ、あんっ、だ、ダメよ、今は力が…はい、らなっ、んんんう！！」

「わかってるよ、この時を狙ってたんだからさ、おれは」

抵抗もさる事ながら、喘ぎ声以外の声も発する事ができない状況下で犯される。

しかも二人きりだ。まさにサボの独壇場…

「エースもルフィもかんちがいしてっからな。勝負の判定をつけるのはおれたちじゃない。姉ちゃん自身だっ」

「あんっ、あぁあっ！ だめ、だめえっ、そんなに…ふかくえぐっちゃ、あんっ、あぁあ！！」

サボはただこれを繰り返すのみだ。

二人がマキノを襲って犯し、いい具合にカラダができあがっている状態での独り占め。

当然彼女の中でもっとも高い評価を得るのはサボになる。

こうして将来を夢見る三人の義兄弟の勝負は、マキノという戦利品を獲て、サボが制したのだった。



「はぁ、はぁ…はぁ、うう…こんな、こんな事がっ！」

片脚の兵隊は強制される己の動きに必死に抗っていた。
だが、気持ちばかりでその行動に一切の歯止めはかからない。

「あぁっ、な、何をやるんですか。その娘はまだっ！」

「違う、違うんだっ！ こんな事するつもりはっ！！」

スカーレットの悲痛な叫びが耳につく。
リク王もあの日、操られるままに国民に斬りかかった時はこんな気持ちだったのだろうか？

「くそっ、くそっ！！ なんて事だッ、この私がッ！」

レベッカは何が起こっているのか理解できない様子で、玩具の兵隊を見返していた。
彼女にとっては、服を脱がされてカラダをまさぐられるのも、単なる遊びか何かにしか思えない。

「あぁ、やめてください！ 私はどうなっても構いませんから、その娘に手を出すのはっ」

だがそう言っているスカーレットにも、他の男達の魔の手が襲い掛かっている。
全員が操られている——だがその事も、どんなに二人に伝えようとも淫らな行動がすべての信を捨て去ってしまう。

「うぐっ、ううう…こ、こんな事を…スカーレット様につ、ぐううう、うおおっ」

「ちくしょう、なぜ…勝手にカラダが！ うああっ！！」

男達の悲痛な叫びは、むしろ滑稽にすら見える事だろう。
なにせそう言いながら、彼女の胸を揉みしだいてはその乳山の頂にむしゃぶりついているのだから。

「うっ！ はぁはぁ、あぁっ、なぜ…こんな事に、ッ…んっ、くっ、ふううう！！」

完全統制された大の男達に囲まれては、レベッカを連れたスカーレットに逃げる術はない。
母娘ともども、待ち受けるは彼らの歯牙にかかる運命しかなかった。

「いやぁっ、おかあさんっ。やめてよお、へいたいさん！ おかあさんが、おかあさんがっ」

レベッカの叫ぶ声が片脚の兵隊にズドンと突き刺さる。
串刺しどころではない、体に大穴をあけられ、そこから自分が壊れていってしまいそうだった。
ドフラミンゴの能力——たかが糸の数本に完全にこうも動きを操られる屈辱に加えての悪魔の所業。

「うおおおっ、こんな、こんな事が許されていいのかっ、ううううっ！！」

男泣きの慟哭も、玩具のカラダでは涙の一粒も流れ出ない。
そうこうしているうちに、二人の秘部には他の男のペニスが迫り、自らの手足が娘の穴めがけて動いてゆく。

「はぁはぁ、そ、それは！！ やめて、そんな事娘にはまだッ…ぐううう！！ あっあっ、ふああっ！！？」

愛娘を守ろうと動くも、先にアソコを貫かれたスカーレットは動きを制される。
旦那の名を叫ぼうにも思い出せない忘却の彼方…
そして皆に忘れ去られた旦那の、玩具と化した体の一部が、己の娘の尻穴へと埋没した。

「い、いたあい！！ やだぁっ、おかあさん、おかあさーんっ！！」

それも最悪な事に、他の男のペニスが同時に娘の操を砕いて貫いていた。
レベッカにかかる苦痛はさらなるものがあるだろう。
たとえ玩具でも構わない、しかしせめてこの体…自由に動いてくれと彼は憤怒に燃え上がる。

「ううっ、ああレベッカ…はぁはぁ、なんてことなの…うぐっ、あう…っ」

妻は泣き崩れ、せめてもと娘の頭を抱き寄せる。
娘は歯をくいしばって苦痛に悶え、せめても母が共にいる事に心の安堵を求めている。

「うおおお、レベッカ、スカーレットお！！」

…そこに自分はいない。
二人が自分を、父であり夫である自分を思い出す事はないという過酷な現実が片脚の兵隊の心の傷を深くえぐった。

「はぁっ、はぁ、うんうっ、おかあさっ…ん！ はぁはぁ、苦しいよお…ぜえぜえっ」

「が、がんばって耐えるのよ…っ、はぁはぁ、レベッカ…んんっ、はぁ…あっあっ！」

乳房をこれでもかと揉み搾られ、下から突き上げるは今では記憶に亡き夫以来の男の肉棒。
必死に、ただ必死に我が子を抱いて、二人耐え悶えるのみ。
そんな本来守るべきもの達を、
その手にかけさせられている苦しみ、汚されてゆくを見させられる苦しみが積み重なってゆく。

「うあああ、すみません、すみませんリク王っ！！」

「なんてなんて事を！ 俺たちは、俺たちはあああぁっ！！！」

だが止められない。
操られているとはいえ、その手に感じる柔らかなオッパイの感触や、ペニスを締める膣の感触は本物だ。
勃起した己の愚息が萎えるはずもなく、最悪の不敬行為に向かってひた走る。

「うううっ、せめて…外、につ…あぁっ、はぁはぁ！ んんうっ、そんな、まだ深くにつ」

「違う、違うんですっ！ 勝手に、腰が勝手に！！」

だがスカーレットの男を見る目は不信感で満ちている。
こんな事をしておいて、いまさら何が違うというのか？ もはや言葉をどんなに尽くしても溝は埋まらない。

「あぁ、レベッカ！ ごめんなさい、守って上げられなくて…あああぁっ！！」

「おかあさんっ、こわいよお、おかあさぁんっ！！」

ドグドクドグドグッ！！！ ビュービュググッ！！

ブシッ！ ブシッィ！ ビュゴルルルルッ！！！ ブゴブッ！！

注がれる他の男の精液、自分以外の男に妻が犯されたという悪夢のような現実。
狭すぎてとても入りきらない娘にぶち込まれたザーメン。
すぐにも噴出して勢よく飛び散り、涙を流さぬ玩具の兵隊の瞳にかかり、白い一筋の線を描きながら流れ落ちていった…。

「じゃあ…いつてくるね、お母さん」

レベッカが出てゆく。
だがスカーレットはぶつぶつとベッドの上で何事かをつぶやき続けるばかりで、働きに出る娘を見送りもしなかった。
すっかり変わり果てたドレスローザで、リク王の血縁たる彼女らは肩身の狭い思いを強いられてきた。
命こそ助かりはしたものの生活は悲惨を極め、ついには成長したレベッカがその身を売る淫靡な商売で日々の糧を得るまでに落ちぶれた。

「…兵隊さん、兵隊さん、フフフ、遊びましょう、兵隊さん」

スカーレットはというと、世間の風当たりの冷たさに心を病み、
なんとかレベッカを育てるまでは保ったものの、娘が一人前になった頃には糸が切れたように壊れてしまった。
毎日、片脚の兵隊の玩具を自分のアソコに突っ込んで遊ぶだけ。
もはや誰が何を言ってもその心に言葉が届くことはない。

「すまん、スカーレット…“守れなかった”…お前を」

間接が軋み、このところ自由に動けない日が増えてきた…
自分の事を忘れて久しい愛妻…彼はもはや彼女の膣をなぶる、大人の玩具の役目くらいの事しかできなくなっていた。



「それが必要だって言うなら——」

彼らはニヤリとした。まさかこんなにも上手くいくとは思ってもみなかったからだ。言葉巧み…とは言えないが、二言三言で幹部をだまくらかせるなど、普通はありえない。

「じゃあちょっと待ってね、すぐ脱ぐからっ」

だが所詮は下っ端だ、ペビー5が一体どこまで本気なのかわかったもんじゃない。自分達の言葉に乗ったフリをして、笑顔で殺しにかかれてもちっとも不思議ではないだろう。いそいそと脱ごうとする彼女に対し、彼らは油断なく身構える。

「あ、そうだ。…全部脱ぐよりこのくらいのほうがいいかしら？」

一瞬グクリとしたが、振り返った彼女の姿に男達は全員ドキリとする。全裸よりもいやらしい、セックスに不要な布だけを取り払ったペビー5の半裸状態に、鼻血を噴く者までいた。

「え？ これでいい？ わかったからそんなに急かさないでよ♪」

嬉しそうに話しながら、男のもとに寄ってくる。己の存在そのものを求められる事がよほど嬉しいらしい。その態度から男達は確信した。

「きゃんっ!? 急に飛びつかないでよ、もう——んっ、んっ」

やはりだ——思い切って唇を奪った勇者、だが彼女は嫌がらないし抵抗もしない。それまで恐る恐るだった彼らに、一気に火がつく。

「んんん…っ、んむ…んっ。んふ、んふ—うっ♪♪」

胸を揉まれ、尻をつかまれ、ふくらはぎに触れられ、腹を撫で回し、髪をいじる。全身余すことなく男達の手が伸びていじられても、嬉しそうな表情で口付けを受け入れている。こんな都合のいい女は他にはいない。下っ端たちの中で急激にペビー5の株があがっていった。しかし…

「う…ん…」

その寝息に、彼らは現実にはひきもどされる。ペビー5との楽園の時は、意識を失っているシュガーの一呼吸で霧散した。

「……ううん、……」

だが、一度やれるという流れに乗った彼らは、いつものように恐れ慄くだけでなく、攻勢に転じようと考え至る。

「——んはあ、はあはあ。え？ わ、私は…あんっ、そ、そうよね、こんなに一片に相手しきれないものね」

何人かがシュガーの方へと動いた事は、少なからずショックだったらしい。理由を聞いても、自分じゃ物足りないと言われてるのだと思ったらしく、シュンとして今にも泣き出しそうだった。

だが人数が揃えば中には機転の利く者もいる。彼はすかさず彼女のアソコに手を突っ込んだ。

「はあん!!? あっ、ひっあひん!! あっあっ、そんなかきまわしちゃ…はあはあ、らめえっ♪」

強く肉体に働きかける衝動を生み出す力任せの愛撫だが、それでも彼女の沈みかけた心を支えるには十分だ。言葉で慰めるよりも、カラダに言い聞かせるほうが彼女には簡単で効果的だ。そうとわかればやる事は一つだった。

「はあはあ、あ、あ…挿入れる？ 挿入れちゃうの、私に？ 私が、私の穴が必要なのね!？」

ああそうだ、お前のマンコが必要だ——そう言うだけでペビー5は墮ちた。膣は途端に糸を引き、進行してくるチンポを柔軟に、しかし二度と放さない勢いで締め付ける。

「あああ、なんて素敵っ、はあはあ、私…こんなにも求められてるっ♪♪」

華やぐ顔に良心がチクリと痛むも、彼らは構わずその身を味わい続けた。その一方で、まるでスリル満点のゲームで対戦しているかのような気持ちで、シュガーに群がる男達は、この見た目おさない幹部に手をかけようとしていた。

「…ん…う…。…グレーブ…、もって…きな、さい……」

寝言の一つ一つに心臓が飛び出しそうな想いながら、少しずつその股間の穴2つに、自分のペニスを挿しこんでいった。いつ覚醒という名の黒ヒゲが飛ぶか…ヘンな趣味に目覚め、痛み付きになりそうなものを感じながら、男達の挑戦は続く。

「……あ…、ん…、玩具に…なりな…さい…、むにや…」

そのフレーズに彼らの心臓は破裂しそうだった。今起きられたら確実に玩具にされる事は明白。しかしだからといって止められない抑えられないこの衝動。厄介きわまりない中、挿し込みに成功した男達は、静かにゆっくりとペニスを前後させた。

「…ううん…、あ…う…、ん…あ…、……」

狭い穴だ、挿入しているだけでもキツイ締め方で十分な快感を得られる。激しく動く必要はないが、同時に思っきりぶちかましいたいという衝動にも駆られる——そんな中、恐怖は目覚めた。

「…あ？ …ううん、…え…な、何よコレ!? あんた達何ひとが気絶してる間にッ…おぼっお!??」

黒ヒゲ人形は飛んでしまった。こうなればもう突っ走るしかない、タルが壊れるまで！ 人生最後の逢瀬だと言わんばかりに、彼らはシュガーのマンコとアナルへと肉棒をぶちかまし出す。

「はぐっ、うぐう!! な、あああっ!? あっ、はあぐううう…こんな真似してっ、どうなるかわかってんでしょねえ!？」

いまさらビビるな、と自分自身に言い聞かせながら必死にシュガーの恐怖に立ち向かう男達。そんな彼らとは真逆に、ペビー5に群がる男達は至福の時間をすごしていた。

「んっ、んっ…んはあ、もっともっと、私を求めてえっ、はあはあ、あんっ、あんっ、あああっ♪♪」

言わなくてもチンポをしゃぶってくれるし、手でシコシコはげんでもくれる。アソコはギュンギュン締め、射精をうながして止まない。

「いいい、この感じっ! はあはあ、きてえ、私の隅々まで味わってえええッ♪♪」

…ゴググッ! グブッ!!! ドグウッ!!!

男からの射精、のはずがまるで吸い上げて飲み込むかのようなヴァギナのうごめき。それはペビー5が心から男達を受け入れているという何よりの証だった。必要とすれば子供だって産む事も辞さないだろう。確かに便利極まりない女だと、彼女が幹部である理由に彼らは改めて得心する。

ビュドグッ! ビュグッビュグンッ!!!

「………。……」

シュガーは沈黙したまま、射精されていた。最高の瞬間であるはずの中出しに、恐ろしい空気が漂う。男達の顔からは完全に生気が抜けている…むしろ玩具にされる運命を受け入れているようだった。

「……なによ、もうおしまい? ……こ、こんなじゃぜんぜんダメよ、ダメ! …もっとよ、できないヤツは玩具にするんだから!」

それは地獄が天国へと変わった瞬間だった。どうやらセックスがお気に召されたらしい…男達は泣いた。歓喜に舞い踊り、次々と二人にペニスを挿しだす。それから毎日がバラ色の日々となった。下っ端達はお呼びがかかれれば閨のお相手ができる…彼らの士気は高まり、結果ファミリーの力を底上げに貢献した。